向陽新聞
高知市塩屋崎町1の2
土佐中・高校新聞部
編集人　丁野　貢一
発行人　西内　正気
印刷　高知印刷

写真
TEL.②6758
大丸東入口前
高橋

向陽会費値上げ決る

値上げ額は二百五十円

◇…　去る十二月二日に中学、三日に高校の総会が開かれ、圧倒的な賛成をもって向陽会費の値上…◇
◇…げが決定され、値上げ額は翌日の中学、高校合同委員会で二五〇円と決定した。今までの向陽…◇
◇…会費は昭和三十五年に決定されてから全然値上りしていなかったのに、物価はその間に約三〇…◇
◇…%の値上りを見せ、各部とも活動に支障をきたしはじめていた。今度の値上げはまだまだ〝焼…◇
◇…け石に水〟とまではいかないにしても〝焼け石がようやくさめた〟という程度のものである。…◇

向陽会費値上げ問題は、二学期の執行部が発足した時、生徒からの要望があり、それを各方面に打診した所、向陽会費値上げについて考えてほしい、という意見が強かったので検討をはじめた。まず各部の実情調査をしたが、その結果各部は現在、経済上窮乏していることがはっきりしたため、執行部は向陽会費値上げが必要と確信してさらにくわしい資料集めを開始した。

まず県内の十六高校に、生徒一人が負担している生徒会費の額、クラブ数、部員数、部員の個人負担額、現在の生徒会費が決定した年、これから値上げをする意志があるかないか、等のアンケートを出した。（しかし、これには七通ほどしか回答がなかった）また三十五年度からの物価の値上りが部活動に与える影響を調べるために、執行部の役員が手分けして県庁の統計課、市内の運動具店、文房具店等を回り物価の値上げ状態を調査した。その結果、県庁では物価が三十五年度に比べて約三〇%も上がっていることなど、具体的に資料が集まった。運動具店、文房具店などでは具体的なものはわからなかったが、かなり上がっているということであった。

これら、執行部が二か月ほどにわたって集めた資料は十一月七日にまとまった。執行部では、ただちに九日に各クラスの委員長を召集。資料を渡して向陽会費について説明し、資料を生徒会員に配布してそれをもとに各クラスで討議してもらった。中学ではほとんどのクラスが、高校でもかなりのクラスが文化祭までに討議し、その中で執行部に報告したクラスはほとんどが賛成だった。中には値上げ金額の点で〝執行部が二五〇円ほど値上げを考えているようだが、どうせ値上げするのなら、後々のためにも三五〇円か四五〇円ぐらい値上げした方がよいのではないか〟という積極的な意見も見られた。執行部は委員長召集に続いて十一日に部長会を開いて、部からも向陽会費値上げについて働きかけるように呼びかけるとともに、校内の掲示板にポスターをはって、生徒の関心を高めることに努めた。

総会はまず、十一月二十六日に開く予定だったが、その日には講堂が使用できないことが二十一日にわかったため、ただちに、執行委員会を開いて方針を検討し、総会を二日に中学、三日に高校と、別々に開くことにした。そして、二十八日から十二月一日にかけて中学生のために役員が放課後各クラスを回って説明した。また、今までの資料に念をいれるため、十一月二十七日から十二月一日まで、役員が市内校を回り、生徒会費、部活動の状況などを調べた。

二日、三日の総会では、議題を根本的な〝向陽会費値上げは必要か否か〟という問題にしぼって討議、説明し、最後に投票をした。開票は三日に中学・高校をまとめて行なった結果、値上げ賛成が七九六票、反対は三六五票で、向陽会費は値上げされることに決定され、値上げ額は翌日の中学・高校合同委員会に委託された。

四日に開かれた中学・高校合同委員会では、委託された向陽会費値上げ額について討議された。まず執行部から二五〇円値上げ案が出された。これに対し、二Kから一五〇円値上げ案、二Cから四五〇円値上げ案が出されたが、投票による採決の結果は二五〇円値上げ案四五票、一五〇円値上げ案一五票、四五〇円値上げ案一票となり、執行部の原案通り、値上げ額は二五〇円となった。これで向陽会費は年に千円となった。この額は来年度から実施されるが、これは一学期のはじめと二学期のはじめにそれぞれ五百円ずつ納めることになった。また、この合同委員会で執行部から〝もし、家庭の事情で向陽会費を納めるのが困難な者がいる場合、その者はホームの主任を通じて執行部に届ければ、執行部で協議の上、免除その他の処置をとる〟という提案があり、可決されたが校長からはストップがかかった。

ところで、総会を中学・高校に分けて開いたのは、執行部の話によると、あのせまい講堂に中学・高校合わせて千四百人が一緒にいることはまず不可能だからだ、ということである。だが、中学と高校をわけて総会を開いたのに対して、高一のある生徒は「もし、中学・高校を一緒にして総会を開いていたら、投票の結果は変わっていたかもしれない」と不満をぶちまけていた。また、「二五〇円ぐらい向陽会費を上げても、吹奏楽部などはほとんど変わらないのではないか。個人負担もなくなるわけでもないだろう。それならば、多少上げても上げなくても変わらない」という意見もある。これに対して「金銭的にはさほど変わりはないとしても、部活動をしている者はやる気が出て来るだろうし、部にはいっていない者も部活動に対して関心をもったという点でも有意義だった。」と金よりも感情の方を強調する意見も見られた。

阿部会長談

色々な苦労もあったが、我々の主張する〝真実〟ということが認められたことは、私の喜びとするところだ。クラブはこれによってますますハッスルしてなるだろうし、またそうでなくてはならない。また、部活動に参加していない者もこれを機会にますますクラブに関心を持ち、部の活動を見守るようにしてほしいし、できれば自分自身も実際に部の中に入って、活動をするようにしてもらいたい。

廃部問題落ちつく

演劇、軟式野球が廃部

執行部は十一月十三、十六日の両高等学校生徒委員会に、運動部では、軟式野球、文化部では、演劇、PFC、図書、園芸、生物、映画の計七部の廃部案を提出した。その結果、自ら廃部を申し出た軟式野球、演劇の二部は廃部と決り残る五部は見送りとなった。

投票の結果は次の通りである。

PFC…賛二十八、反八、棄三
図書…賛三十、反七、棄一
園芸…賛十五、反二十一、棄二
生物…賛二十、反十六、棄二
映画…賛十五、反二十一、棄二
軟野…賛三十四、反四、棄一
演劇…賛三十四、反四、棄一

（賛は廃部に賛成、反は反対、棄は棄権である。なお廃部決定には自ら廃部を申し出た時は、全議席数の過半数、その他の時は三分の二の三十二票を必要とする）

次に執行部は廃部理由として、今回の廃部案は先に行ったクラブ調査の結果であり、向陽会費値上げ問題とは、意を異にするものであるということを強調して

一、これら七部はいずれも部活動が低下あるいは停止の状態にある。したがって活動もしない部を部として存在さすのは無意味であり、他の部に対しても良い影響は与えない。

二、これらの部においての、将来活動が盛んになる可能性は小である。したがって現在は廃部もしくは同好会とし、先においてこれらの活動が活発になれば、その時に部昇格を考えるのが妥当であるなどをあげていた。これに対する反対意見としては

一、短期間にわたるスピード調査で、四十に近い部の実態を調べることは不可能である。このたびの廃案がスピード調査の結果によることは危険である。

二、一度同好会あるいは廃部になれば部に昇格することは困難である。

三、過去の実績と、各部の性格を尊重すべきである。

などがあった。特に部関係者の不満を買っていたのは、このたびの廃案が先に行なわれたクラブ調査によったことである。これから先、クラブ調査に関してはまだまだ問題がありそうである。

すべての審議が終ると鶴和議長が「今回の生徒委員会は、見送りとなった五部に対しては、部としての存在価値を認めたわけであり、今後の部活動の促進を要求したものである」。と述べたことは、廃部問題に対する委員会の態度として、注目される。またある意味において、今回の廃案が熱行部の期待に反して、五部も見送りになったことが、これら部が部として存在する値があるから見送られたことを意味するのか、それとも熱行部の廃案の資料が少かったために見送られたのか、いずれにせよ、このたびの廃部問題によって、各部が刺戟され、熱行部に一目置く様になったと言える様である。今後の問題としては、廃部というそれ自体のあり方が論議されそうである。

部活動に思う

部の意義を再認識

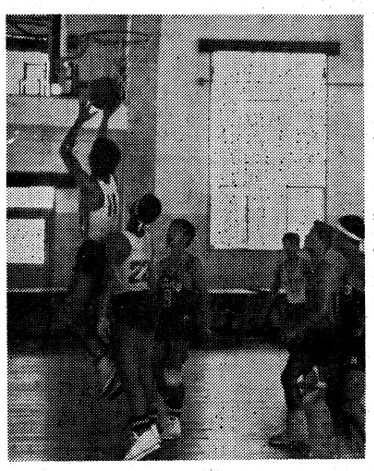
学校長　曾我部清登

この前の生徒委員会で二つの部が廃部になった。残念なことと思う。この廃部問題について部の性格云々ということもでているようだが、私としては部とは部員各自がつくりあげてゆくべきもので、学校があらかじめわくをきめてそれにはめ込むべきものではないと考えている。そして文化、またそれぞれの部において活動のしかたも違えば各々の性格も当然異なったものであるはずだ。〝活動したい〟生徒の間では充実した部がつくられ、その盛り上がりが無くなれば自然消えてゆくのも仕方ないことだろう。しかし諸君は部というものがその時代時代の校風を築きあげた重大な要素であり、また現在においても学校というものを構成している大きな柱であることを忘れてはならない。もし部というものがなくて勉強ばかりの学校生活が送られるとしたら、学校は一種の予備校と変わらぬものとなろう。部というものはそういった、一授業のみでは得られない何ものかを諸君に与えてくれる場なのだ。しかしこの何かを具体的に言えといってもそれは一口に言えるものではない。計算してこうだという答が出るというものではない。先になって考えてみると部生活で得た何ものかに気づくはずである。それは一人一人の人間形成の上における〝何ものか〟というよりしょうがない。そして繰り返していえばそのような何ものかによって校風が築き上げられるのであるこういう意味で一般生活も部というものの意義をよく理解し、また部に所属している者も今一度その意義と各自の責任を認識して欲しいと思う。

部活動をする者は

文芸部員　広地　洋

現在部活動に参加している僕にとって、文芸部をより一層発展させて行きたいと思うと共に、この部の特色を余すところなく吸い取ってやろう、という気持でいっぱいである。部活動をすることが将来役にたつかどうか考えるのは、怠惰であって、その考えのもとに部活動を続けて行こうとする人には〝軽蔑〟という言葉を贈らなければならない。部というものは、解り切ったことだが、いわば情熱の固りの集合であると信じている。だから熱情のおもむくまま（但しその節度を考慮の上に）自分を投げ出し、部と一心同体になることが本当ではなかろうか。部というものを甘く見ているものにとって（同時に部そのものにとって）決して良いことではない。部は質から衰えて行くだろうし、その人自身も精神的に発展することはないだろう。それゆえに部に付属している者は、たえず自分を見つめ、グループの皆と共に勉強していけば、色々な点でプラスになることがあるに違いない。僕はこの考えのもとに行動するしまた行動したいと思っている。



変な先輩

吹奏楽部々長　岩井　千尋

部活動、確かにそれは進歩し、向上している。しかし一方ある意味での内容の豊かさ、奇抜さなどというものが、時代が進むにしたがって消されていく様な気がする。その一つとして昔流の〝豪傑〟が少なくなった。先輩はそれを嘆く。「誰のか知らんがこの弁当、食べてしまった。美味った。下宿の俺には故里の味がした」。と言って紙切を空の弁当箱にほりこんで、平然としていたという先輩。風邪をひいて学校は休んでも練習にだけは出ていた先輩、夏の真昼間に帯屋町をステテコで歩いた先輩もいたそうである。変な例ばかりあげてしまったが、とにかく今はそういうことをするものがいなくなってしまった。みんなが従順しくなった。学校の授業だけでは、絶対に得られない物を部活動によって得、それによって「人がやらないことでも自分はやってやる」。というような気持、元気、を持つことが出来にくくなってしまった様に感じる。これはドライな世間の考え方、学校のありなどが影響をおよぼしているのだと思う。人々は「その方がいいじゃないか」。というかも知れない。しかし自分は、そういう〝変な〟先輩にどうしても親しみを感じてしまうのです。

真の部活動は

舞踊部々長　竹村千鶴子

部活動とは、部活動の場が何者かによって与えられて活動するものではなく、生徒がその場を要求し、自らの手で作りあげて行くものだと思う。だから無理に生徒を入部させたり、自分がその部に対して、あまり熱心でないのに入ったりして、学校にこんな部が存在するから入部するんだという様な考え方は、考え直してみる必要があると思う。部員は少くても、充実した内容を持つ部活動ならば、それでいいのではないかと思う。

局外者として

一S　高山　宏

あらゆる意味で我々の年代は不安定であり、その時期の唯一の教育機関が、極端な傾向を持つということは、最後的には充たされない印象しか残さないのであって、危険である。なお率直な言葉をもってすると、本校にそういう危険性のあることは認めないわけにはいかないし、我々もそれを承知で、おそらくはその門に入ったのです。

しかし、実際、とにかく社会的な地位を確歩したと言っても、高校時代に生み出される良い収穫は二度とできない――これだけは間違いないのです。

部活動がその学校に適当な形（これも忘れてはならないことです）学習活動と平行に行われている学校を想起すれば、部活動の意義は容易に理解されるのではないでしょうか。また単なる学習活動のみではいわゆる人格陶冶は甚だ不十分に尽きるばかりか、それ自体をも無味乾燥にしがちであることも重ねて想起すべきでしょう。人格陶冶と言えば、何か堅苦しく仰山な準備いるようですが、信望のある指導者に、純粋な一つの興味に引かれて自然に集まる生徒と、局外者の理解の伴った部活動であれば、それはいつのまにか良いものになっているのです。その一つの現われが部活動を通じての人間関係です。学生時代の部活動を通して結ばれた友情の堅さについては誰しも口にするところです。局外者である私にして、上級下級の区別も、男女の別もなく、一つ机に座して話し合っている側を通る時、何か自分が全く非力な異分子であるかの様な寂しさ共に爽やかさと暖かみを感じないではいられないのです。また本来そうあるべきクラブでは、各々の関心を更に伸すことが出来るし、それはその構成者一人一人に、一つの共同体としての益を与えてくれると思うのです。〝自分一人ではできなくても、協力し合えば必ず成る〟有能な社会人を育てようとする教育者の最後の目的はこれではないでしょうか。この謙虚な気持が、実に多くの副次的な利益を、自然に彼らに与えるのに違いない。でなければ客観的に、不当な程、報いられない活動の中に自分を好んで置く、彼等の気持は理解しようがないのです。

今私を含めての局外者は、彼らの運営が巧妙でないのを非難することは止め、再びクラブ活動の意義を考え直すべきではないでしょうか。

バレー部昇格なる

さる十一月の第七回、高等学校生徒委員会において、バレー同好会部昇格が執行部より提出された。その結果、当同好会は、再審議要求後、賛成三十五、反対二、棄権一を持って部となった。なお同部は去年の二学期頃に同好会の形で発足し、現在は男生徒二十名、女生徒十五名の計三十五名をもって形成するまでにいたり、このほど部としての存在価値が認められたわけである。

バレーボール部部員合田君談

今度僕達のバレー同好会が、めでたく、昇部してとにかくうれしい。コーチもなく場所もないが、三十七もある部にまけずに、立派にやってゆきたいと思う。しかし現在、男子は高校生が殆んどなのでバレーを問わず運動競技は、早くかなればうまくなるので、バレー部発展のためにも中学生にどんど入部してもらいたいと思う。

各部担当委員辻俊行君談

この二学期は、ある意味で部活動の転機ともいえるのではないか。大きな波にもまれ、苦しみあぐんだ部活動状況の中から生まれたものが、演劇、軟式の廃部、バレー部の誕生、向陽会費の値上げであった。バレー部の誕生、本当にいいことであると思う。去年の九月に芽をふいて以来着々とその歩を進めて、遂に一人前になった。その勢いは他の堕落した部などは、足元にも寄れぬもので、部昇格は当然のことであった、我々執行部の目指した新しい部活動の出発と共に生まれた部だと思う。今後の活躍を期待したい。

文化祭

スムースに運営される

去る十一月十八、十九の両日、本校恒例の文化祭が開かれた。今年は、昨年と同様、中学生が十八日、高校生が十九日に登校した。午前中は、自動車部、山岳部、新聞部、文芸部、写真部、美術部、書道部、生物部の各部により、高三の教室と書道室に色々なものが展示され、午後は講堂で、吹奏楽部、音楽部、舞踊部、英語研究部による芸能発表会があり、日頃の活動の成果が公開された。

展示の方で注目されたのは初参加の自動車部だった。自動車部は高三Sホームの教室の半分を使い自動車のメーカーから借りて来た資料、パンフレットや、交通事故の写真、交通標識の見本などを展示して生徒の人気を集めていた。映画研究部は生物室で、聖火リレーの時の八ミリを映写した。また、芸能発表会では、男声合唱団の石川君達の〝男声カルテット〟が出て「カリンカ」「遠くへ行きたい」などを歌って万雷の拍手を浴び、最後の吹奏楽部によるポピュラーパレードでは〝アンコール〟の声も飛び出すなど、生徒は文化祭を有意義にまた、楽しく過ごした。

全体の運営はスムーズに行なわれ、生徒には好評だった。しかし内容においては「全体的に見て変化がない」「マンネリ化」という意見もかなりあり、来年の文化祭にかなり問題を残している。十一月二十日に行なわれた文化祭反省会でも、部の責任者の間では、改めて文化祭のマンネリ化について考えてみる必要があるのではないか、という意見も出ていた。

トヨペット購入する

自動車部は九月末に、高知イズ自動車より、トヨペットクラウン（六十年型）の中古車を、六万円で購入した。この自動車は、去年の高知自動車学校より本校に寄贈のあった黒塗りのトヨペットから、まる一年目に購入されたものである。新年早々にある自動車競技会に備えて、この自動車での練習の成果が期待されている。なお今回の費用は、部員の貯金と、先にあった二台の車を売った金とで支払われている。

校内短信

○…広松政恵さんが病気のため入院されたので、十月十九日より浜田俊雄さんが、代わりに小使さんとして本校に来られた。

○…十一月二十六日、日体女子短期大学生三十名とその関係者が、本校講堂においてダンスと体操の実験会を催した。

ひとこと

衛生観念ゼロ

〝日本人は衛生観念がない〟などとよく言われるが、まったくそのとおりであって、本校ときは言語道断である。早い話が年に一度はダニがわく校舎である。その立派な校舎をいくら

ヒステリックな女でも〝住み心地がいい！〟などとは言うまい。まして生徒がそう思うわけがない。なにも

今すぐに新校舎を言うつもりはないが、それならばそれで学校は衛生上の処置を完全にしてもいいと思うのだ。一番みっとも良くないのは、時々妙な物が溢れ出してくる、学校において

の必需品、便所である。日本人は〝便所〟と聞くと〝不潔〟と連鎖反応的にそう思わずにはいられない民族の様であるが、それでは便所はキレイかと言えば全くお話しにならない。

いかに日本人が〝エテカッテ

神経〟の持ち主であるかは、便所においてすぐに分るのである。本校においてもそれは全くひどい状態にある。本校には二つのそれがあるが、裏門近くの便所の如きは、長年の間排出物により壁は崩れ落ち異様なさまを呈し見るも無惨な姿である。その侵食作用の威力にただ驚くばかりである。この便所にしても、もうひとつのそれにしても、生徒は上履のまま、あるいは下履でそこへ行くというのが現状である。この一見あたりまえの様なことが、いかに非衛生的であるか考えたことのある人が何人いるであろうか。雨の日など、体育室の前の廊下が濡れているのはどうしてであろうか。中には履きかえる手間が省けていいと考える人がいるかも知れないが、実際問題として、便所に行ったそれで、廊下を教室を歩きまわることがどれだけ衛生的であるか、ひょっとしたら学校中に大腸菌がうようよしているのかも知れないのである。そんな教室に花を生けては気持がいいなどと言っている者のお顔を拝見してみたいものである。保健の時間は何をやっているのか〟この様なことが公然となされているということに学校は何も感じないだろうか？実に情け無くも恥かしい思いでいっぱいである。教育の場である学校がこれではお話しにもならない。一日も早くこの便所については、万全の処置を講じて欲しい限りである。（S・N）

宇賀／多田＼文庫誕生

今年の七月心臓麻痺でなくなった本校第二十八回生の宇賀正男氏と、同じく二月腎臓病でなくなった多田満仲君（当時二C）両君の御遺族より香典返しに、「何か生徒の役に立つものを購入してほしい。」と、それぞれ三万円ずつ学校の方へおくられてきた。

学校側では、校長先生と、同窓会関係の仕事をしている、小松、森下両先生とが相談した結果、図書館に本を購入することになり、宇賀氏は早大で仏文を専攻されていたことから、ボードレール、サルトル全集を、多田君は日本文学が大変好きだったことから、新潮社の日本文学全集を、それぞれ購入、そして去る十一月十六日、本校図書館に、両君の遺志を継いだ新しい文庫が誕生した。

阿部会長談

このたびの執行部の廃案が、五部の見送りに終ったことは、生徒委員会がそれらの部の存在を認めたのですから、執行部としては今後それらの部の部活動が促進されることを望むだけです。

編集後記

私達にとって未経験な四面。闇夜を行くがごとく手探りで進みました。でき上りはいかが。まずごゆるりとお読み下さい。

らくがき

▼冬となれば一年もようやくおしつまる。十二月は師走という。何かと慌しい季節ではある▼だからというわけではあるまいが廃部問題が勃発して関係各部の部員は騒然とした。「御用！」となったのは数部、結局二つの部が潰れて残りは極どい所で収拾となった▼廃部問題の直後に活動が活発になるのはいつものこと。良薬は口に苦しなどと喜んでいると、また喉もとを過ぎてみたら……ということにもなりかねない。今度のこの笛の音に合わせていつまで踊ってくれることを期待する▼各部には刺激になっただろうが二つの部がつぶれた。初めからこの二つも活動不活発ではなかったはず。どうにもしようがないという事情もあったのだろう。人の振り見て（といえばこの二部の部員であった方には気の毒だが）各部も今一度自分の部を眺めわたしてみてはいかが。臭いもの身知らずともいうではないか▼廃部問題と前後して文化祭が開かれたが、演劇部の出場がないゆえか何かもの足りない感があった。芸能発表会といえばどうも頭にくるのがマンネリズムということはだ。古い皮袋に古い酒が満ちているのではどうしようもない▼当事者にはそれなりの苦労があろう。しかし観覧者にとってもそれなりの苦痛がある。全員観覧の制度に甘えて退屈を与える権利はどこの部にもない▼いっそこれも展示同様に自由観覧としてはどうか。そうなれば各部発表の評価は如実に示されようし、部自身にとっても良い結果が得られるであろう。観覧者の少ないことを心配される部の方は「サクラ」でも雇えば良い。ただし観覧者がサクラだけということもありうるだろうが▼運動会、文化祭と二学期の行事は終わった。待つものははや冬休み。クリスマス、お正月と楽しいことばかり、さだめし不良する人もでてくるだろう。学生学生といわれる学校生活から解放される時期である。ひとつしっかりと自分自身の意志で行動しようではないか▼お好み焼き屋に入って哲学を論ずるのも結構、金のあるものは食い歩いても結構、金の無いものは本屋で立ち読みしても良い、旅行するのもまた良ければ、つれづれなるままに飲み歩いては……少し困るが、とにかくにもこの冬休み、後悔の残らぬよう過してほしいものだ▼除夜の鐘は百八ツこの数は人間の持つ煩悩の数であるという。去りゆく年の自分についた煩悩を取り去って新しい年を迎えようという。昔の人は敬虔な心でこれを聞いたであろう。来年のことをいえば鬼が笑うというが今年は来年に続き、来年は未来に続くのである。今年ももう暮れ、身を控えて、また来年の飛躍に備えようではないか。

（K・C）

趣味の陶器を沢山揃えております
依光陶美堂
高知市オビヤ町　TEL②2321

新築落成に、ご婚礼用、ご出産用に、祝餅、赤飯、饅頭
老舗
中納言
本店　大橋通り②0573③2490
潮江店　天神町②2979

ヒフ病薬　新薬は
はりまや薬局
はりまや橋四国銀行本店前　TEL②2665

新刊書籍
学参の御用は
金高堂書店
へどうぞ
帯屋町中ノ橋通り　TEL②8285

男女　制服　御注文　既製品
入交学服
中ノ橋電停前
TEL②1776 2744

美しいフジカラープリント
スピード仕上――3日
キタムラカメラ
堺町19　TEL②3154～6

主張

活動のみの判断は危険

廃部の善後策を確実に

去る十二月二・三両日、生徒総会が開かれ向陽会値上げが決定し、四日の中高合同委員会において値上げ額二百五十円が決定した。この決定にさきだち第八回高校生徒委員会おいて軟式野球、演劇両部の廃部が決定しまた九回生徒委員会ではバレーボール同好会の部昇格が決定した。このような激しい向陽会の動きに対し、部活動というものを考えながら慎重にふり返る必要があるだろう。

そこで廃部問題について考えて見よう。この廃部は向陽会費値上げ決定以前に行われ、執行部は「廃部は値上げとは関係はない」という態度をとっていたので値上げ以前の状況で考察する必要があろう。

十一月、廃部が決定される以前の時、活動部数は四十一、予算総額約百三十万円。これらの状態で各部に充分な活動を望むのは困難であり、存分な活動を望むには個人負担を軽くして経済的束縛を少なくし心から部活動に打ち込んでもらわなければならない。そこで考えられたのは廃部か向陽会費値上げであった。執行部ではこの両方をとりあげ並行して進め、かつ、廃部と向陽会費値上げとは関係なしという態度を示した。そして九月始めから各部の活動調査を行い現在不活発であるという理由で数部を選び委員会にこれをかけた。しかし向陽会費が値上げされたらこのように多くの部を委員会にかける必要がなかったように思われるし、もし値上げが否決された場合は廃部をより強く打出さなければならなかったのであろう。つまり廃部問題を検討するのは向陽会費値上げが解決してから行われるべきであったといえよう。それをあえて、廃部と値上げとは関係なしとしたのは、その裏に不活発な部をやめさせ、残っている部はすぐれているとし、値上げの際に〝部をやめさしたらよい〟という意見を出させない事前運動にすぎない。それは、確かに必要であったかもしれないが、そのような目的で廃部することは納得できないのである。

しかし今年の向陽会費値上げ額が二百五十円、この額と物価上昇率から考えるとさほど良くなったとはいえなく、その上本校では他校にくらべ部数が多く一つあたりの部が充分な額を支給されるとはいえない。だから今後も廃部問題を検討する必要が出てくるであろう。その場合今回のような活動が不活発な部という考えのみで行うのは危険である。我々は部活動を考えるのに、活動状況のみで考えようとする傾向があり、それのみをよりどころとして「その部は必要なし。」と考える。たしかに活動ということは大事である。だが活動のかげには、相互の信頼とか、心のささえとか、その他いろいろの面があり、それが部を作っている。そういうものを頭にいれてから部というものを見てもらいたいのである。又、今回のような二カ月やそこらの短期間のクラブ活動調査では無謀にもほどがある。せめて半年くらいの調査は必要であっただろう。そして一応過去にも目をむける必要がないだろうか。

「過去は過去」と割り切ってしまえば終りであるが本質からいえば過去も現在も同じである。行動を共にし自分を良くし、部全体を良くしていこう。それが部活動の本来の目的であり、その手段として多数の部ができたのである。同じ目的で同じ学生というものが行うかぎり、過去に盛んであった部が盛んになるとは断定できないにしてもその可能性は非常に大きいものといえよう。

又、考えられるのは廃部後の対策である。今回のような〝一時同好会にさがって活動し、盛んになれば部にすればよい〟というような執行部の案では無責任きわまりない。現在の部、同好会援助費はごく少く同好会となったら余けいに活動が行い難く、部に昇格するのは非常に困難なものになるといえよう。

「また後で部に昇格したら。」という安易な考えで部でなくては活動できないような部をみだりに廃止することは納得できなく我々は、部、同好会援助費を増したりして確実な善後策を立ててもらいたいのである。

さて廃部と反対にバレーボール同好会が部に昇格することになった。長い間、援助もほとんどなく独自で頑張って、廃部部とさわがれている中で、その活動が認められ昇部したことは非常によろこばしいものである。これからは新しい部として苦労が多いと思われるが私たいはあたたかい目をもって新しち部を迎えてやる必要があろう。又その反対に改めて、今まである部にも、新しい理解をいただいてもらいたいのである。

波乱の多かった運動会

今年の運動会は〝波乱の多かった運動会〟とよくいわれる。優勝争いが最後まで決着がつかなかったこともあるが、それにもましていろいろの面で問題点が多かったことによるのであろう。一寸例を承げても、色別、櫓、小委員会等、たくさんのものがうかんでくる。しかし、その反面、〝静かな運動会〟ともいうことができるであろう。全体の雰意気、仮装行列など……。

去る11月10日、家庭科室において、各役員、小委員、その他の代表が集まり、第17回運動会の反省会が開かれた。この会において、学校代表の松木・西田両先生（体育科）から11月・日行われた職員の反省会での意見が発表された。この反省会での結果などを参考にしながら、いろいろな問題点を探り反省してみよう。

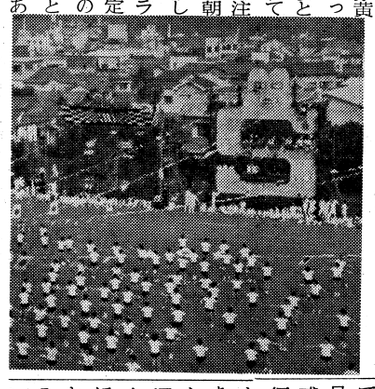
小委員会　執行部との関連を

盛り上りの少い運動会

総評　今回の運動会は盛り上りの少ない運動会になってしまったようである。その原因としては明方天候に恵まれず観客が少なく、生徒も自分勝手に行動したものが多く応援にまとまりがなかったことや、競技がバラエティーに富んでいなかったことなどが挙げられる。食堂は、ほとんど生徒でいっぱいであり、櫓の陰では下級生が悪戯に悪中で、競技する人の中にも自分たちだけで楽しんでいるという人々が見つけられ、全体としての意気込みが上らなかったこともあるだろう。「最上級の高三生が一寸悪ふざけが過ぎてはいなかっただろうか。」という意見が聞かれたがこれも非常に影響していたといってよいだろう。

小委員会活動　今年の運動会も例年と同じく、運動会小委員が一学期末に選定され一切の運営が任された。この小委員会は一学期に設置された為に、ほとんど第一期執行部で占められ、現執行部との関係が少なく独走的であったといえよう。

このために生徒との連絡がスムースにいかないという事態が起った。小委員会はほとんど議会を開かず、全権移任という肩書きをもとに独断的に物事をはこび、その決められた事項は発表する機会がないため生徒の間に確実に通達されなかった。かっては、高校と中学の色別関係は抽選で行なわれていたが、小委員会は独断し、その上その決められた色別が明確に告示されなかった。その為、鉢巻きを買う時まで色別が分からなかったというクラスも見られた。その極端な例は中学のA組で起った鉢巻き購入の際のトラブルである。中学Aホームでは、小委員会のミスか、学校のミスかわからないが、最初、赤色の鉢巻きを購入し小運動会に使用した。ところが小委員会から、赤黄が一つになった鉢巻きにせよと伝達がき、あわてその鉢巻きを注文し大運動会の朝になって配布した。これらのトラブルは連絡不撤定の為に起ったものであり、執行部と



の関連が絹密であったならば機関紙という立波な連絡方法もありこのような事態は起らなかったのであろう。

この事に関し、前季生徒会長は「二学期に小委員会を設けたら時間的な無理ができ、充分な予備ができなくなる恐れがあった。だから一学期に小委員会を人選したが、第二期執行部が決っていないために含まなかった。」といっている。

しかし一学期に第二期執行部が選ばれなかったのは前季執行部のミスから起ったものであり、早く小委員会が選ばれたからといって一学期に見立った活動をしたわけでもなく一学期に選ぶ必要もなかったといえよう。

運営・内容　働き予想外に立派に終ったこれは前にも述べたように、役員を希望者から選定したことによるのであろう。しかし高二の修学旅行やオリンピック休暇のために期間が短かく役員が積極的に立派に終ったこれは前にも述べたように、役員を希望者から選定したことによるのであろう。しかし高二の修学旅行やオリンピック休暇のために期間が短かく役員が積極的に立派

採点方法に考慮の必要

変化のある仮装行列に

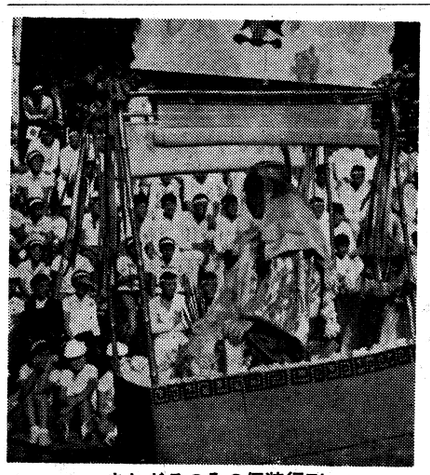
仮装行列　全搬にいって元気がなく、ただ着飾るのみの仮装行列に終り、去年までの風刺したものや汚れものは姿を消し、全部が全部といっていいほど小綺麗に小じんまりとまとまっており変化のないつまらないものとなってしまったように思える。この原因は小委員会が、汚れたものは採点外。集団のとれたものが望しいと注告したためであり、始皇帝にしろ、成吉思汗にしろ、ナポレオンにしろどれも同じようなものばかりであり見るものにとっては飽きがくるようであったといえよう。仮装行列といっても仮装するだけでは観客は満足を覚えるわけではなく多少皮肉をいわれてもよかっただろう。

かって、医師会の活動が盛んであったころ本校の先輩が皮肉って〝日本意志会〟と題して気勢をあげたところ、医師会から脅めを受けたというエピソードがあったが、このように他人に迷惑を及ぼすような皮肉はともかくとして、ある程度のユーモアや皮肉も必要ではないだろうか。ある観客の意見であるが「近ごろの仮装行列はまったくつまらないものになった。昔の土佐高の仮装行列は非常に豪快でやはり土佐高ならではという感にうたれた。」という言葉には良くことしの仮装行列への感想がのべられているように思われる。

又、仮装行列を行っているものだけで楽しんでいたように思われそういう面からも物たりなさが感じられた。このことは仮装列のみならずほかの種目に於ても考えられたことである。

仮装行列に採点をし、一位から最後まで順位を決めることは昨年に引きつづき今年も行なわれたが、生徒の間ではあまり評判がよくなく反省会でもその事が話題にあがり討論された。「一番から六番までは、はっきり順何をつけられると、上位になったクラスはいいけれども、下位になったクラスは同じ費用をかけて苦労して作ったものが悪い思い出となったり、劣等感をいだいたりするであろう。順位を決める必要は何もなく、一位だけわかればそれでよいのではなかろうか。）「採点をすることは競走心もわき賛成であるが一部の先生、来賓の人だけで採点するのは一寸おかしいのではないだろうか、採点をする人を一般観客、生徒、職員などから多勢あつめて、広い範囲で行えばまたおもしろみもあろう。」というふうに今年の採点方法に不満を持つ人も多い。

これからの仮装行列の行き方としては、マンネリ化をふせぐためにバラエティーに富ませることが当然必要であり、ホームゲームの音楽のように伴奏などにもおもしろみをもたせ視感覚のみでなく聴感覚からもうったえるようにすることも考えられるし、その他いろいろな工夫が考えられる。又反省会の席上、松木先生から「本当にやりたい者とう集って一つにまとまって何か行ったら。そうすれば、やりたいものだけでやってしまえという考えのものが見つけられ、障害になっていたが、そんなこともなくなるだろう。それに、計画を立てて独特のものを作り出せるであろう。



きかざるのみの仮装行列

スタンド式が好評

来年も存続

櫓問題　今年も小委員会、高三生の活躍で今まで通り設置された櫓は各組とも装いをこらし独特の雰意気をかもしだしていた。作年から現われ応援のまとまるスタンド式櫓は昨年にひきつづき白がいれ、自組はその後にも普通やぐらの一部をとりいれていた。この方式をとりいれると、スタンド式では差異が見られないという欠点が解消されるであろう。このスタンド式櫓でのまとまりのある応援は閉会式の際に校長の賞讃をうけたし、職員全徒の反省会に於ても「すばらしかった。」という声がきかれた。他のクラスのやぐらも城型など色は工夫をこらしてあったが杉を多く用い、生徒が見る際の邪魔になっており、生徒全員が楽しむには無理が行きすぎるようである。高い費用をかけて作るものであるからできるだけ多くの人に利用してもらい、意義のあるものにすれば、やぐら廃止などという問題は発生しなくなるだろうし、本当に楽しい思い出となるに違いない。

しかしこのスタンド式櫓は、奥行の面で規定をオーバーしていたことが明らかにされた。スタンド式やぐらの安定性を保つには地盤を広くとらなければいけないことと費用が多くいるという点が欠点である。その為にいちがいにスタンド式にせよということはできなくだんだんとスタンド式に変えていくことが望まれる。またその他全搬のやぐらについて、材料の入手に困難をきたしていたがよく研究して新しい方法でやぐらを作ることも考えなければならないだろう。

開会式、閉会式の国旗掲揚、奉納の際に櫓にある色別旗を上げ下げした事について学校は「国旗掲揚は全員が日本人であるという誇りを感じさすために行っているものであるからあのような見苦しいことはやめろ。」という強い遺憾の態度を示した。しかし生徒にとって各チームの象徴である色別旗を掲げるのには何か荘厳な場でと望むのが当然であり、来年からは国旗掲揚の後に色別旗揚という項をもうけたらという声がきかれた。

反省会の席上、学校代表の松木先生から、来年も櫓は存続されるであろうという発言があったが、来年の高三生は今年の高三のように意義ある櫓を作り再来年もその次の年までもずっと続くようにしてもらいたいものである。

立派だった運営

運動会準備　前にも述べたように今年の小委員会があまりにも櫓問題に力をいれすぎ、他の方面がお留守になったといえよう。その為プログラム作製にも無理なところがあったり採点方法にも一考する必要な個所が見つけられた。

運動会役員を決める際に各クラスから希望者をつのりそれを割り当て、各役員を決定した。今までは委員会は生徒委員の中から適当に人選していたが、これでは行いたくない者まで含まれ、活動に支障をきたしていた。この方法のためか役員の積極的な活動などにより運動会は準備期間が短かったものの、非常にスムースに運営された。

その他、反省会に於て「櫓や仮装行列などの物資は顧問や、主任の了解を得て購入すること。又、クラス用か、学校用か明確に告げて購入すること。そうしないと納品書が学校に廻ってきて非常に迷惑である。」「運動会、特に櫓、仮装行列の為に校舎が汚れる。」という意見が学校側から発表された。

第二に今年の小委員会は、細案などを放り出し、櫓問題ばかりに走りすぎたことがいえる。そのためにハチマキの問題など起ったといえよう。

しかしこのような非難の反面「短い期間によく頑張った」とか「あくまで熟行部と小委員会とは別のものであり、今回のような形態が望ましい」というような声も聞かれた。

第三に今年の小委員会は、細案などを放り出し、櫓問題ばかりに走りすぎたことがいえる。そのためにハチマキの問題など起ったといえよう。

しかしこのような非難の反面「短い期間によく頑張った」とか「あくまで熟行部と小委員会とは別のものであり、今回のような形態が望ましい」というような声も聞かれた。

役員が積極的　役員が積極的に立派に終ったこれは前にも述べたように、役員を希望者から選定したことによるのであろう。しかし高二の修学旅行やオリンピック休暇のために期間が短かかったクラスも見られた。

反省会に於て役員側からは「召集の際あまりにも分散しすぎていた。昼食を食べる時を統一していないため名々勝手に食堂に入り、入りびたりになっているということが見つけられた。昼食の時間を統一することは時間的にむつかしいが、プログラムの順序を変えて時間の余裕を見つけることも考えられる。

ホームゲーム　高三生が運動会を楽しむ一つのものであるが、これも一寸同じようなものが集りすぎている。「できれば打合せ会などをして適当に変化をつけてほしい」というような意見が反省会で出されていた。しかしこれは「他のクラスに見せたくない」というものであるそうでなかなかうまくはいかないようである。

部活動報告

運動部

ソフト部（男子）　高体連で優勝、秋の大会でも優勝候補にあがっている。放課後三時半から五時半までの練習時間は全国優勝を目さして熱心な練習ぶりを見せている。

応援部　野球試合の応援だけしか知られていないが、実際は校内整備、食堂での混雑を防ぐなど隠れた活動もしている。できれば資金の都合をつけて他の部の応援もできるようにするとのこと。

無踊部　先日行なわれた文化祭において今までの活動の成果を発表した。これからはもっと練習を積み踊りを一層優れたものにしたいと考えている。

水泳部　九月の県体で団体三位個人では一位に三人入賞した。現在全国大会をめざして基礎体力を作る為に毎日三時半から五時半頃まで、プールの上で熱心に練習を続けている。

軟式庭球　長瀬杯で団体個人共に一位、秋期大会において団体二位で目下のところ基礎体力を養成している。

自動車部　現在部員は20名。自動車の構造の勉強や運転技術を養うことが活動目標である。その他に体力強化としてマラソンなどをやっているが、自動車の操作は場所の都合から早期、または放課後遅くになるので活動が目立たないのが誤解を招くので損な点だそうである。

文化部

映画部　文化祭では、八ミリ映画「聖火土佐路へ」を公開したが、それだけでは短かく物足りなかったとのこと。これからは学校の行事があることに映したり映画新聞を作ったりしたいそうである。

美術部　去年から石膏やデッサンを始め文化祭には石膏・油絵・水彩画等三十点程展示した。今後、他部（書道部・文芸部等）と相談して合同発表会を開きたいと思っているそうである。

文芸部　毎年二回「筆山」を発行しており今年は三学期に三十三号を出すつもりである。部員の作品を主に載せているが、少い時は募集しているからなのでございます。自分の都合のみで勝手なことはいえないのでございます。雲の上の方々にとってはわかりきった事を聞かされるのもさぞかしきのどくに思われるのでございます。又、私としても進んでいる人々とテンポをあわせていたらかえってわからなくなるでしょう。

何といっても私が普段に努力をしていなかったのが悪いのでございます。でも三百六十人いるんですから必ず六つのクラスにわかれるわけです。そういうことを考えて下さって、この問題を先生方にも生徒の皆さんにも検討していただきたいのでございます。【LQ】

吹奏楽部　見聞きして楽しいものを目的として活動しており、今年の文化祭では、グレン・ミラー特集、闘牛士のマンボなど、去年と変った曲を聞かせてくれた。毎年学校内だけでなく、いろいろな施設を回って演奏している。なお去年の全四国コンクールの小編成クラスでは、一位に入っている。

合奏部　今まで、目立った活動がなく文化祭では、吹奏楽部に比べると曲の数も少なかった。これからは文化祭の為の練習でなくて、練習目数や量をふやしていくそうである。

生物部　今までは筆山の植物の調査が主であった。その成果として文化祭には植物の標本百種ぐらいを展示した。その他昆虫や魚類の標本と調査の結果も展示した。今後も、これにひき続き魚類の生活を調べていくつもりである。

書道部　今年は、部員三十六名のうち三名が県展に出品した。又、文化祭では、百点ほど展示していた。これからは、部としてのまとまりを保って、活発に活動したいそうである。

声

クラス編成に思う

私は高一のある生徒でございます。今年の高一は例年になくレベルが低いということでございまして、担任の先生方もおっつかっていらっしゃるとか。そのためか毎日といっていいほど発破をかけられているのでございます。ところがこの間世にもショックなはなしを聞かされたのでございます。

その話しとは「来年度のクラス編成には今まで違って成績がインフルエンスするかもしれない」ということでございます。この報告は私どものクラスの先生のみが気合いをかけるのに行ったものと思っていましたが、他のクラスでもこういうふうな事をいったという事が伝わってまいりました。それで私もびっくりいたしまして、全校の生徒に考えてもらいたく無精ながらも筆をもったわけでございます。

担任の先生方は「単なる成績順位からのクラス分けではなくて、各人の程度に応じて分けてその中で出来るかぎりの力を出せるように」とおっしゃられていましたが私のような劣等生にとっては非常に重大な問題でございます。はるか雲の上にいらっしゃるお方にとってはいいかもしれませんが、下位のクラスに置かれる者にとってはみじめでなりません。今まで四年間仲良くやって来人たちとの間に五つもの厚い壁ができ、劣等生とうし集められて、レッテルを貼られるとはどう考えて見ても気持の良いものとはいえないのでございます。これは私ひとりの気持ちでしょうか。

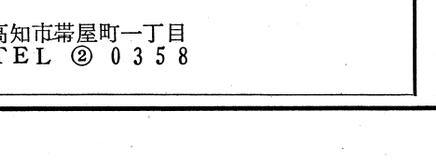
しかし私は絶対反対だということはできないのでございます。なぜなら雲の上の方々に迷惑がかかることは公衆に迷惑をかけると、ここ十数年来禁止という態度を示めしていられたのでございます。

オミコシかついで——市内を潤歩

時は一九六四年十月三十日。本校運動会の前日。そろいのハッピを着込み、ネジリ鉢巻といういでたちで本校生徒十数名が酒樽みこしを肩にかけ、気勢をあげて静かな町へくり出した。ワッショイワッショイの掛け声も勇ましく、街頭をねりあるき、通りがかりの人々も目を見はらせた。

この快挙を企だてたのは三Kの勇士の面々。彼らは、運動会の宣伝に一役買おうと決心。警察署で手続を済ませ、某会社からハチマキハッピを借り受け、このお出ましとなったもの。

このお祭り騒ぎ、高知新聞に載せられ受けが良かったものの、学校では公衆に迷惑をかけるとの理由で、一流大を目ざす受験生には、実益をかねた読物。あらゆる受験参考資料も特集。二〇〇円



入試の秘訣を語った二つの記録！発売中
合格体験記
灘高等学校解説
東大、京大、一橋、阪大、九大、慶応、早稲田等一流大合格者の勉強秘訣
現役ですぱっと入った幸運児、田舎の高校のために苦労した人、何年も浪人した人、独得の記憶術や勉強法をあみだした人、恋愛を捨てた人等十五人の受験記録。各人の高校時代の成績や使った参考書と、その一冊ずつについての良し悪しも特集。二二〇円
お母さん合格よ
サンデー毎日評—東大に合格した受験生の日記。とくにストレートで合格した女子高校生のものなので、一流大を目ざす受験生には、実益をかねた読物。あらゆる受験参考資料も特集。二〇〇円
東京新宿赤城下42　秋元書房　振替東京27047

株式会社
広松運動具店
本店　高知市本町114　大橋通り南入東側
支店　高知市本町115　大橋通り南入西側

高知市本町58　大劇東角
皆様の皮膚の店
つちばし薬局
TEL ② 5876番

古本誠実買入
井上書店
高知市帯屋町中の橋通り
TEL ② 3921

サンゴはぜいたく品ではありません
りっぱな工芸品です
土佐の名産サンゴにカッオと
全国に知られています
土佐名産サンゴと
装身具は
池田珊瑚店
高知市帯屋町一丁目
TEL ② 0358

紳士服装専門店
—お誂紳士服
—高級既製服
—レジャースポーツ
＜土佐高制服、オーバー＞
廣松屋
大丸北口前　TEL ② 2338

部分

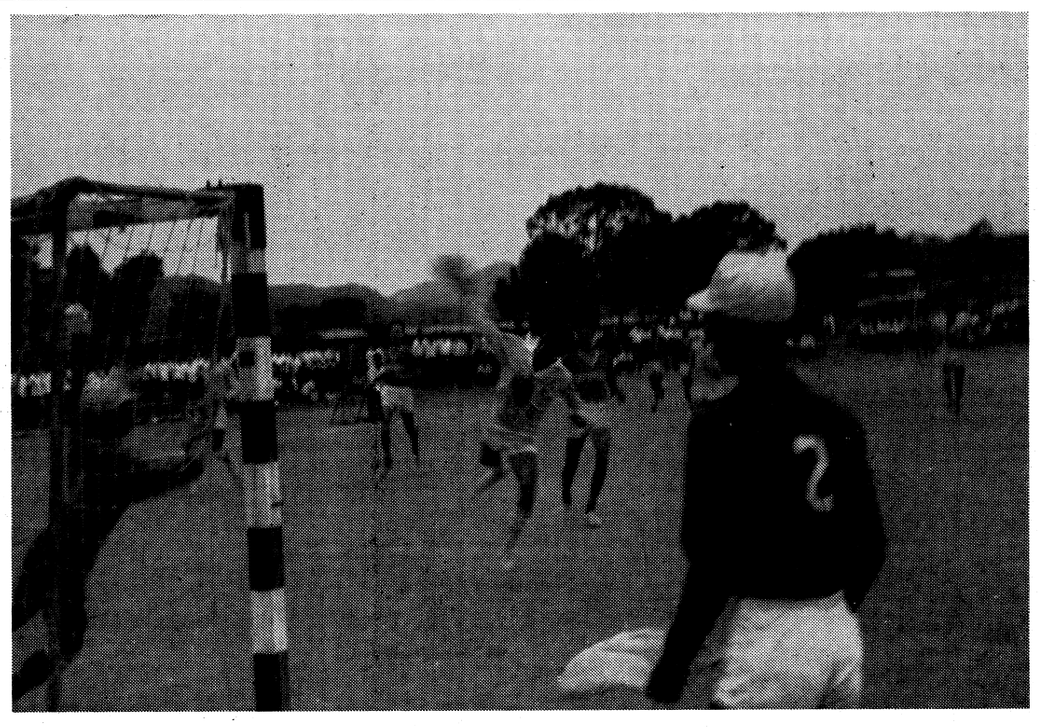
新聞部では次号（第六十五号）から長年続いて来た一寸失礼を中止することに決定しました。またいつか復活することはあるでしょう、とにかく訪問記事としては当分「スポット」だけでやって行くつもりです。

その代わり……といってはなんですが、この「部分」を創造しました。正式名称はまだ決めておりませんので、これは今号だけの仮の名前です。来号からは囲み記事として扱う予定をたてています。これを創造した主目的は、直接自分達にふりかかって来たものを追究して行くのでなく、自分達に大きな影響を与えるものだけれども何か忘れられている、または何か取り立てて問題にはし難い、そんなものをここに上げて、もう一度考えて頂こうということなのです。従ってその範囲は限定することはできません。ある時は社会問題にもなるでしょうし、またある時は校内の雰囲気などを取り上げることもありましょう。事件的なものに関連する場合もありえます。とにかく、これは現代の「部分」なのです。

記事の書き方も千変万化することでしょう。解説記事、ルポタージュ記事、それから感想文的な要素を多分に含んだものも、思いつく極端な例を挙げれば会話ばかりで構成することもないとはいえません。僕達はこれを楽しく、そして有意義なものにして行きたいと思っていますから、場合に応じて、まあそれは記者の構成に任せることに致しましょう。今回は部分第一回として特に「学生」という問題を取り上げてみました。

（編集長）

学生



この時彼らの魂は一個のボールに！

これも著者の一面である

某公立高校でたまたまこんな話が出た。学生がなぜ帽子を被ろうとしないかという問題である。その時ある先生がおもしろいことを話された。その高校（かりにO校とする）の父兄が、O校の目標としているH校の生徒の生活を見学しようと上京し、H校の校門に頑張ったそうである。ところが登校して来る生徒に帽子を被ってないのがゾロゾロ来る。O校の父兄諸氏は養気を抜かれて、帰郷後H校の生徒について語らないということである。この話をされた先生はまたこうもいわれた。「H校などの有名校の学生が帽子を被ろうとしないのは、帽子の威厳を誇示したくないからなんだね。つまりエリート意識を持ってると思われたくないからだというんだね。」

では反面、三流、四流校と呼ばれる学校の学生はどうか。O校の先生は語る。「帽子を鳥打ち帽のように被って帽章をかくす風潮がありますね。あれは県外の私立校生に多いそうです。」彼らに働くのは劣等意識だという。彼らの姿勢は逃避という形態しか持っていないのだ。

ある人はこういう。「ぼくはH校の学生の態度に学生の一つの姿を見る。社会からの『エリート』という眼。そんな個人が無視されたものに対してのささやかな反抗があるのじゃないか……」またある人はこういう。「もし三、四流校と呼ばれる学校の学生が同様の反撥を示したらどうか。それは必ず不遜な態度と取られるであろう。だから彼らは帽章をかくすしかできないのだ。」

この行動を生んだものは何か。I君の話を聞こう。「ぼくはある座談会で親と子の間で著しく意見のくい違うのを見た。少年非行の問題で親は子供に自覚を求める。子はこの問題について社会の歪を指摘する。つくづく今の学生は社会に不満を持っているのだと感じさせられた。」学生は社会に対して非常な圧迫を感じていることは到底否めそうにない。それが有名校と三、四流校の学生をしてこのような行動を取らせたのだとも言えるであろう。しかし、I君は、このような考えも持っている。「ぼくはその座談会を見て、親に代表される社会の自分勝手さに腹が立ったとともに、学生である子の側の、少年非行の原因をひたすら社会の歪に責任をおしつけようとしている態度がそら恐しく感じられた。」

道徳の眼は確かに厳しく冷たく、しかもその重大な曲がり方を我々は往々にして見せつけられる。しかしここに学生自身を考えてみるべき余地はないのだろうか。社会に不満を持つのも良いが自分自身を見つめるとどうなるだろうか。実際のところ現実というものは、社会の偏見に圧迫を受けながら、しかもその社会の皿をそっくりそのまま受けついだ胎児が社会に向かって怒号している。そのような身勝手な状態なのではあるまいか。

そして、それは現代学生の姿なのだ。市立図書館に勤めるWさんは「社会には渦がある。」といわれる。先の二例にしてもその渦への反応である。「諸君はその渦の中でなす術もなく身を任せるのではいけない。」つまり、自分の頭で考えることである。自分を諦めてしまってはいけないということなのである。「学生時代とは社会への準備の期間である。諸君はその中でじっくり自分の人間をつくり上げるのだ。現在の社会に巻きこまれて自分を見失うとすれば、いくら不満な世の中でもそれは果てなく続いて行く。諸君の中に忘れられている大きなもの、それは、未来の社会は自分達でつくるのだ、という自覚ではないだろうか。」Wさんはこの点、昔の学生が今の学生に優れていた点の一つだという。そしてWさんの御注意はごもっとであった。「個人々々がいくら一生懸命になっても社会全体はどうしようもないような気がするだろう。たしかに一人だけ実行してもかえって馬鹿を見るくらいかも知れない。しかし誰がいったのか忘れたが、こういうことばがあるのを知っていてもらいたい。それは『一人では何にもできない。けれども誰かが始めなければならない』ということだ。」

Wさんは学生時代を「社会に対しての準備期間」だという。Wさんは学生時代の利益をこう語る。「学生時代はいろいろと悩みがでてくるだろう。しかし、その学生時代こそ、物事を最も純粋に考えることができる時代だろう。諸君はその悩みを社会の利益に向けておおいに活用してほしいと思うのだ。」学生時代の利益第一とはまきしくこれ、つまり、「純粋な精神」ではないだろうか。学校を卒業した先輩の多くが高校時代を懐しむのもこれに起因するものであろう。それは裏返していえば、高校卒業後は物事を純粋には考えられなくなるということにもつながるのだが……。そこに一つの断層ができるはずである。反抗期といわれる言葉に代表されるようにその「純粋なもの考え方」から若者は社会に抗議するようになって来るのは必定である。「若い人選の一直線な考え方、これはぼくは尊いものだと思います。若者ならではのものですからね。大切にしたいものです。ただし、その際に、それが狭いものにならないことが肝要ですね。」むやみやたらでは困るということである。

「一つのことにもいろいろのものの考え方がありますからね。やはり他の人選とも話し合って、自分の考えをより広範なものにして行く。またそんな友情を育てられるのも学生時代だと思いますがね」

しかし学生時代、自分の思想を信じた者の中には過激に突っ走る傾向がある。この点どうWさんはお考えになるだろうか。「ちょっと待てといいたいですね。自分の考えが真実であるとは限りません。もう少し慎重に跳み止まって考えてみることが必要ではないでしょうか。」しかし、実際に即してそのような行動が取り得るだろうか。あとはWさんとの一問一答形式で御紹介しよう。

――しかし、そこで踏み止まること自体がその人にとって真実でなくなる時は――

難しい問題ですね。しかしやはりお社会の一員として深く考えて欲しいとは思いますが……

――では、学生時代に良くありがちな殻に閉じこもるのは――

若い人が殻に閉じこもるというのはどうもねえ。もっと積極的に行動して行くべきだと思います。

――しかし、それが自分の人格完成に必要な場合は――

学生時代の考え方は純粋ですが一人合点に陥りやすいものです。その点、自分の人格完成のためにと考えるのは危険です。

――もし、自分の真実を求めることが社会に何の貢献ももたらさない時は――

自分がしっかり人格を完成できるならそれで立派なことだと思います。

――では最後に、もし色々な人と相談して、その上でやはり過激な行動をする必要を感じた時は――

その時は、一直線に進んで良いと思います。また、それが若い人の特権ともいえるでしょうから。

Wさんの御意見を伺ってこの話をまとめたが、しかし、我々の周囲にはまだ数多くの問題が残されているのである。Wさんの話は一つの参考意見として、我々学生自身ももっともっと考えてみることが必要ではないか。書き終わって、ふとこのようなことを感じた私の感慨であった。（K・C）

社会の血の胎児

一直線の尊さ

明治維新の頃、土佐からは多くの優れた人材が出たがその後にしばらく人材は生まれなかった。これを嘆いた川崎幾三郎、宇田友四郎両氏は、特殊教育による人材の養成にあたることを決断し巨額を投じて土佐中学校の設立に着手した。大正九年一月十四日三根円次郎氏が初代校長に就任され、同年二月二十四日川崎、宇田財団法人土佐中学校として認可され、四月十六日より川崎氏探家で一学年三十名の授業を開始した。大正十一年四月八日当時は県下随一といわれた立派な新校舎と資材にも環境にも恵まれた中で授業が開始された。官学に反対した独特の学校をつくるために土佐にやって来た三根校長は後年失明されたのに廊下を杖なしで歩いていた。生徒の数が少ないので学校全体の雰囲気が大変家庭的だった。校長は生徒一人一人の名前や性格をよく知っており、生徒選は三根校長を〝おとう〟と呼んで慕っていた。今の向陽会が当時の自治組織で校内外の生活の規律はいっさいこれに委ねられ四年生が幹部で校風維持に当たった。飲食店に入ったり映画を見たりした者、脱帽している者等は皆これに呼び出され強引な注意を受けた。このように学校全体の秩序は全部生徒の手によって維持されていた。スポーツの面では、設備はそろっており、庭球、野球、弓、など盛んに行なわれていたが、何しろ人数が少ないので、対抗競技にはあまり出場出来なかった。世間には土佐中は勉強の出来る青びょうたんの行く学校だといわれていたが、生徒自身はのびやかな雰囲気の中でよく遊びよく学んだ。

音楽家平井康三郎氏のように自分の個性を伸ばして行く者もあり、大方の者が一流校へ進学して行った。昭和十年三月十八日教育理科室付近の便所が半分、鉄棒だけという有様だった。こんな中で校長は断乎授業を継続しようと決心したが校舎がない。それでやむをえず分散授業校の方法をとり学年別に県立城東、海南中学、高岡郡尾川村、香美郡山田町、長岡郡大津村の各小学校および高知郡和小学校の教室を転々として授業を行なったのである。校長先生を始め諸先生有力者などの我を忘れての奔走の結果仁井田の兵営後より旧兵舎の払い下げを受け仮校を建設、二十一年八月から全校生徒とともに授業を開始したが、天井も講堂もないので青空の見える下で式をした。教科書がないので夜プリントをすったらインクが悪いので朝には蒸発して字がところどころ明治維新の頃、土佐からは多くの優れた人材が出たがその後にしばらく人材は生まれなかった。これを嘆いた川崎幾三郎、宇田友四郎両氏は、特殊教育による人材の養成にあたることを決断し巨額を投じて土佐中学校の設立に着手した。大正九年一月十四日三根円次郎氏が初代校長に就任され、同年二月二十四日川崎、宇田財団法人土佐中学校として認可され、四月十六日より川崎氏探家で一学年三十名の授業を開始した。大正十一年四月八日当時は県下随一といわれた立派な新校舎と資材にも環境にも恵まれた中で授業が開始された。官学に反対した独特の学校をつくるために土佐にやって来た三根校長は後年失明されたのに廊下を杖なしで歩いていた。生徒の数が少ないので学校全体の雰囲気が大変家庭的だった。校長は生徒一人一人の名前や性格をよく知っており、生徒選は三根校長を〝おとう〟と呼んで慕っていた。今の向陽会が当時の自治組織で校内外の生活の規律はいっさいこれに委ねられ四年生が幹部で校風維持に当たった。飲食店に入ったり映画を見たりした者、脱帽している者等は皆これに呼び出され強引な注意を受けた。このように学校全体の秩序は全部生徒の手によって維持されていた。スポーツの面では、設備はそろっており、庭球、野球、弓、など盛んに行なわれていたが、何しろ人数が少ないので、対抗競技にはあまり出場出来なかった。世間には土佐中は勉強の出来る青びょうたんの行く学校だといわれていたが、生徒自身はのびやかな雰囲気の中でよく遊びよく学んだ。

音楽家平井康三郎氏のように自分の個性を伸ばして行く者もあり、大方の者が一流校へ進学して行った。昭和十年三月十八日教育

土佐校十五年の歴史

和二十年四月青木校長が辞任され、大島校長が就任せられてわずか三ケ月半優美と施設の完璧を誇った校舎は七月四日高知市の大爆撃により一夜の内に灰燼に帰してしまった。

わずか残った物といえばプールと三根校長の胸像、今はないが新館

明治維新の頃、土佐からは多くの優れた人材が出たがその後にしばらく人材は生まれなかった。これを嘆いた川崎幾三郎、宇田友四郎両氏は、特殊教育による人材の養成にあたることを決断し巨額を投じて土佐中学校の設立に着手した。大正九年一月十四日三根円次郎氏が初代校長に就任され、同年二月二十四日川崎、宇田財団法人土佐中学校として認可され、四月十六日より川崎氏探家で一学年三十名の授業を開始した。大正十一年四月八日当時は県下随一といわれた立派な新校舎と資材にも環境にも恵まれた中で授業が開始された。官学に反対した独特の学校をつくるために土佐にやって来た三根校長は後年失明されたのに廊下を杖なしで歩いていた。生徒の数が少ないので学校全体の雰囲気が大変家庭的だった。校長は生徒一人一人の名前や性格をよく知っており、生徒選は三根校長を〝おとう〟と呼んで慕っていた。今の向陽会が当時の自治組織で校内外の生活の規律はいっさいこれに委ねられ四年生が幹部で校風維持に当たった。飲食店に入ったり映画を見たりした者、脱帽している者等は皆これに呼び出され強引な注意を受けた。このように学校全体の秩序は全部生徒の手によって維持されていた。スポーツの面では、設備はそろっており、庭球、野球、弓、など盛んに行なわれていたが、何しろ人数が少ないので、対抗競技にはあまり出場出来なかった。世間には土佐中は勉強の出来る青びょうたんの行く学校だといわれていたが、生徒自身はのびやかな雰囲気の中でよく遊びよく学んだ。

音楽家平井康三郎氏のように自分の個性を伸ばして行く者もあり、大方の者が一流校へ進学して行った。昭和十年三月十八日教育

ちょっと失礼

森下睦美先生の巻

からり秋晴れのドライブびより、われわれは今回の主人公、森下先生の運転される車に、ちょっと不安な気持を抱いて、〝ちょっと失礼〟させていただいた。その日の目的地は佐川の妙像寺、青山文庫。出発に先立ってます一言。「週刊誌なんかでよく見かけるような質問には答えませんよ。」…少々痛い一言だったが…。

十一時過ぎに、七五三でにぎわう妙像寺に到着。紅に色づいたもみじの下で写真を写して、そろそろ質問開始である。

I日本文学の道を選ばれたのはいつのことですか？

歴史と日本文学との間をふらふらさまよっていたのが、大学一年の頃、歴史より少し興味の多かった日本文学の方に進路が定まって、大学三年の頃から本格的に力を入れ始めた。

註・先生がこのようなことばでなく、ていねいに答えて下さったということは言うまでもない。

I教師になろうと思われたのはどういうキッカケで？

高校二年のとき、将来何になりたいかという作文を書かされて、その時に教師を希望した。

今そのとおりになっているのだが、教壇上で〝人間〟という、私の最も興味のあるものについて、じっくり観察することは本当にゆかいだ。

…言われてギクリ。諸君、注意めされよ。この先生、観察されにでなく、しに来てるんだ。

妙像寺から青山文庫までの道は短く、質問はここでちょっとひと休みである。

入場料二十円は先生に出していただいて、勤王の志士や、井伊大老の遺品や遺文を見てまわった。さすが、歴史の方にヨロメカレタことのある先生だけあって、われわれには興味のない係員の話に熱心に耳を傾けておられた。

丁度お昼になったので車の中で食事をとることにした。少々オギョーギが悪いが、食べながらの質問である。

I先生の中学、高校時代は？

あの頃の女子は今と違って消極的でね。男子の中には〝女の子はしとやかでなければならぬ〟という考えを持つ者も少なくなかった。中三頃になると、男子は女子に、女子は男子に興味を持つようになったけど、

（特に女子は）胸に秘めているだけで行動には移せなかった。（おー、なんと美しい乙女の心のしおらしさよ。）私も、自分はいつも男の子と友選になる心構えだったけど、相手の方がこわがってね。高校時代、「女の子はナマイキダ。」という男子と女生徒側を代表して女性のためにケンカしたこともあった。その相手に、大学時代デイトを申し込まれてね。もちろん承知しましたよ。

…われわれはついて出るため息をおさえることができなかった。女の武勇伝はどうしてこうもロマンチックな終結をみるのだろう。

I大学時代はいかがでしたか。

女子大（東京女子大）特有のヌルマ湯的なところもあったが、半面旦先のことにガツガツするということもなく、人生について真剣に議論しあえるような雰囲気だった。例えば、徹夜で政治や宗教を論じたこともあったしね。そう、デモにも参加しましたよ。ーとにかく、すばらしい大学だった、私の娘もぜひ行かせたいと思っています。

…土佐のオテンバどもよ。君たちもこの大学へ行きたまえ。卒業したら先生のようにしとやかになってるよ。

I現在の土佐中、高生を見て何か思われることは？

私もかってそうだったけど、自分の意志とか考えだとかで行動するのではなく、人が見ていいと思うような、つまり、判断を他人に依存したようなモハン生が意外に多く見うけられる。私は、大学に入ってからそれが実にムナシイことだと知った。他人が何と言おうと、自分のいいと思うことは、やれるところまでやってみるのが一番良い。それだけの勇気があればたのもしい。

…以上で用意していた質問は品切れ。これからあとは付録であるる。

I先生のモットーは何ですか。

モットーって別にないけど、好きなことばは、『人間は人間の未来である。』誰が言ったのかは知らないけど。

I兄弟ケンカは？

おおいにしますよ。ケンカをするということは兄弟どうしがそれだけ親しいということでしょ。

…先生ここに笑っておられる。立かした弟の立き顔でも思い出されたのか？。ここでちょっと注意を。先生はしょっちゅうケンカをされるそうだが取くみあいは一度もないとのこと。生徒諸君のケンカと同等に考えないように。

I運転免許は？

去年の十月でしたよ、案外うまいでしょう。記事書くときにはウントほめておいてね。

…だからここに明記しておかないとうらまれるので一言。

森下先生とドライブするときには生命保険の必要なし。われわれが出発の時に心配したことは、これをかけておかなかったということだったのだが…。

I帰りはもうすっかり先生の腕を信頼して、調子のはずれた歌声も車に同乗してきた。

（M・Y）

残念ながら「一寸失礼」は今回をもって中止することになりました。来号からは代わって「部分」を連載致します。

（編集長）

ドライブ先にて

生命保険無用

しおらしき？乙女時代

土佐高の店
舶来品を
国産品を
そろえています
白亞堂
帯屋町
TEL②2473

クリスマス
プレゼントに
本を！
新店舗建設中
仮営業所・京町
本店・ハリマヤ橋北側

皆様の――――
お帽子の店
元田帽子店
高知市帯屋町
TEL②2591

信用あるお店で安心したお買物を
通学用・旅行用かばん
マエダ
かばん店
高知市帯屋町18　②8600・8601

〝土佐名物〟
お土産は
立石蒲鉾店
高知市京町4
大丸東側　TEL②6279

お買物・お食事は
便利な
はりまやばしターミナルで
土電会館
取締役社長　宇田耕也

話題の栄養素
特許
カレー焼き
マンソート
梅ノ辻電停前

レコードフアンの〝いこい〟の場所
レコード ショップ
エリート
25日新装開店（中ノ橋電停南10米）
※25日まで旧営業所にて営業致します
（中須賀電停北100m東入り）
営業科目　レコード高価買入れ
時価レコード常設
オーディオ相談

新年会に
折り詰めを！
定評あるうまさ
新店舗
寿し柳
TEL②0105・0106
南ハリマヤ町四銀南

文化

（撮影　IT　国則君）

冬の、一日の、極み。空に赤い雲、ひらひら。長い時間が来って……穏やかな均衡が破られる……沈んでゆく光景。孤独へと転換する、鮮やかなボーダーライン。この時、すべてが、澄みとおった眼を輝かせ、麗しい寂寥へと向う。水は深遠のいしだたみ。が、陰影は激しく泣きはじめる。黒々とした存在がひとしきり嘆を語り、おおらかな沈滅を拒もうとする――

――それは人の姿。安逸の破壊の訪れる、そのひとときと……されど罪なる意識はなおも衆を求めて彷徨いつづける。世界は赤い血。諸々のものに覆われる純潔の象徴。そして、完全へと隔離される方向に、事物は暗くつつまれてくる。

――夕暮れの影の上を、寂しげな冬が歩いてゆく――そして、一時ひとときき、絶対支配はすべてを覆いつくそうとする現在である。

すぽっと

密度のある番組を

仕事は趣味の延長

三十一回生　島村稔さん

志摩みつるさん、こういえばもう御存知の方も多いことだろう。毎日午後十一時からのラジオ人気番組「ミッドナイト・エコー」のディレクターである。今回はこの志摩みつるさんを、本町にある高知放送局にお訪ねした。

受付にお願いして待っていると、やがてさっそうと階段を駆け下りてこられた志摩さん。

「保護者同伴ならいいだろう」と、気軽に近くの喫茶店に案内して下さった。二階の窓際に陣取りながら、しばしこの世の別天地、その一段と高い所から、高知城のお掘を見下しながら志摩さんにお伺いする。「今のお仕事面白いですが。」「面白いねえ、もう今の仕事そのものが僕の趣味の延長みたいなもので、全くやりがいがあるわけよ。まあ自分としては、好きなことやらせてもらって給料もらってるんだから、なんだかすまないような……ハッハッハッ」

…太い眼鏡、大きなパイプ…色鮮かなヒゲ剃り跡、時々椅子にうずめた上体を揺るようにして笑いながら、次々と喋って下さった。この志摩さんこそ実は、本校第三十一回島村稔さんその人なのである。「数多い先輩をさしおいて恐縮だなあ。」とおっしゃりながらも、気軽に質問に答えて下さったのによると…

中学生の頃は「新聞記者以外に職はない。」と心に決めていた島村さんは、本校卒業後は医者になるつもりで、東大の理二（今は理三が医学部だが）を受けられたが失敗。森鷗外の様な形態を望まれていたそうだ、が「医者がパアになってしもうて。」そこで、早稲田大学の第二文学部文科に入られ西鶴を専攻されたのは「実は中三の頃から西鶴に興味もってね、一体どんなこと書いちゅうろうと思うて…そこで県立図書館に行って片っ端から読みあさった…ウン…ところが何を書いちゅうやらさっぱり分からいで、腹が立ってやめてしまうた。」しかし高三になり受験勉強の合い間に読んで見て「成程面白いこと書いちゅう。」と思ったそうだ。そういう事で早大に入った時は、「西鶴をやる！」ということに決めていたという。

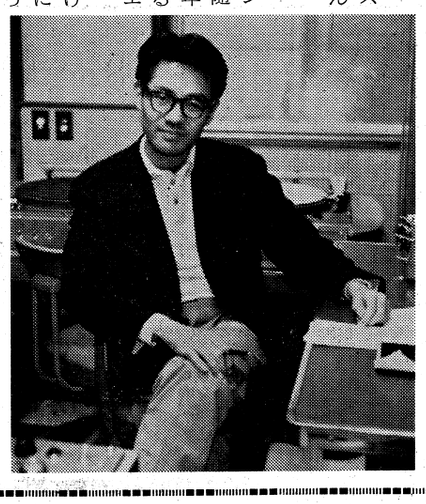
もともと才気に富んでいた彼は在学中から芸能界に足を踏み入れた。シナリオ書きたさに映画会社に入たのが始まりで、コマーシャルフィルムを作り、DJライター、フリーになってからはルポライターもやられた。そういうわけで、早大を正式に卒業されたのは三十七年、卒業後は広告代理店に在籍、CMソング作りに専念された。「だから僕の場合、いずれもアルバイトのようなもので、芸能界といっても本筋じゃありませね。」趣味もさすがに広く、在学中は山登りをしたり…合唱、ピアノのおけいこも「それに競輪予想屋の免許も持っちゅうしね。」そのユーモラスなお話の中に巻き込まれて、筆を持つ手も疎かになりがちの我々に、突然「まだ名前の紹介がないが。」とおっしゃられたのには、記者一同ギャフン！「これはどうも、気が着きませんで…」と、一同恐縮した面もちで一人一人挨拶するのを「それじゃ、改めて、初めまして。」と愉快そうに受け答えしておられる。

ここで、現在の職場に勤められるようになった動機をお聞きして見ると「ウン…実はお袋が悪うてね…それ迄考え考らしい考行もしてなかったし、そこで、東京を引き上げて来た訳。」さて帰っては来たものの、別段する事もない。毎日パチンコ屋に通い、その時もうけた金で今の自転車を買ったという。しかし毎日パチンコばかりしている訳にもいかないし、そうこうしている内に今の話を聞いて高知放送に入られた。――勿論その間に十分親考行されたことはいう迄もない――「本当いうと、又すぐにも東京に帰るつもりだったんだが…やって見ると面白うなってねえ。」ミッドナイト・エコーを初め、（電話リクエスト）（ミュージックダイヤル）等数多くの番組を担当していらっしゃるが、中でもこのエコーが一番楽しいという。この番組は、ファンからのリクエストによって構成するものであるが、「リクエストの数が多いので、どうしても期待を裏切るケースが多い。しかしどうやってみんなに満足してもらえるかが腕」と自信ありそうな顔をなさる。一番多いのは誕生日のプレゼントだそうだ。「しかし中には随分ふざけた物もあるね。」一年に何回も誕生日を持っている者、違う名前で何枚ものリクエストをしてくる者、「しかし、こっちにはちゃんと分かるわけよ、筆蹟も同じじゃし、それに全部一諸に届いて来るし、どうせやるなら、もっと頭のあるやり方せんと……ハッハッハ」リクエストの殆とは中、高生である。それだけにまた彼にとってはやりがいがあるらしい。「放送を通じて中、高生に触れることができ幸せだと思っている。」のことばを裏付ける様に、彼はリクエストに来た名前はみんな記憶しているという。

彼の口から、私の同級生の、K君、T君、M君…等の名前が次々と出てくるのに驚かされた。半数以上は〝偽名〟であるというが、その〝偽名〟である記者の一人も、見事に当てられてしまった。―なんとなくそんな気がする―そうである。すっかり親しみを覚えてしまった記者は、よそ行きの敬語も忘れるように口をついて出ない。「まだ若い、これからやりたいことだって沢山あると思うけど。」「ウウッ。」とうめき聞いて下すった。『直木賞』でも取りたいなあ。」ズバリ！おそれいりました。「人間目標を見失ったらもうおしまいじゃきね。」という彼は「放送を通じて、みんなに潤いのある、変化のある、そういう生活をおくって欲しい。そういうことによって〝より幅の広い人間形成〟というものが成されるんじゃないかな…これが僕の望みよね。その為にもこれからは、より密度のある番組を作って行きたい……しかし。」と自分に掛けられた義務の大きさを感じながら、「これは直木賞を取ろうという以上に大きいね。」こういう彼の顔は本当に真剣だった。

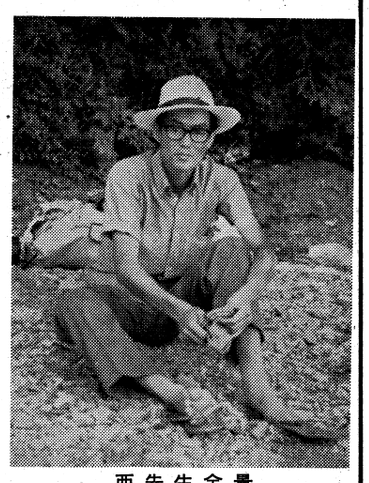
「これからは益々忙しくなる。」という島村さん、これからの活躍に期待しよう。

（H・K）



紀行旅先の友

西和彦先生特別寄稿



西先生全景

私の乗ったバスが喘ぎ喘ぎやっと峠にさしかかると、一望のもとに洞爺湖のパノラマが眼下にひらけ、その湖面には女性的な島影が静かに横たわっていた。バスが湖畔の終着駅に着くと、私はいつもの通り、まず七貫もある荷物を駅にあづけ、その夜の露営場所を捜そうと人家の西側の湖畔に出た。

一ケ月半の予定で北海道旅行に出た大学三年の夏のことで、まだ北海道が観光ブームに乗る前の、もの静かな自然に接することの出来た頃のことである。

その場所は西に昭和新山、後に有珠岳をひかえた小さな教会の庭であった。牧師の許しを得、そこにテントを張るべく駅から荷物を運び、すぐに夕食の仕度にかかった。その時五十米と離れていないところへ十数名のグループがテントを張りはじめたのである。静かに過ごせると考えていた夜をふいにした思いで、その時は少しがっかりした。

夕食をすませて私は一人湖の静かな波音に耳をかたむけながら、昭和新山登りなど地図を広げて明日の計画を練っていると、私を呼ぶ声が聞こえる。出てみると先程のグループの一人で、不足がちなのでローソクを少しわけてくれないだろうか、とのこと。さすがにあまりいい気はしなかったが、渡してやると、彼は礼を述べたあと一緒にキャンプファイヤーを囲まないかと誘ってくれた。このローソクを借りに来たのは彼らの口実で、本当は私を仲間に入れてくれるのが目的ではなかったかと、私は後になって考えた。

その夜は楽しかった。彼等は室蘭の人形劇グループで、昼間は室蘭製鉄所に勤めているという。彼等の浅黒い顔はファイヤーに照らされて生き生きとしている。ゲームあり、歌あり、人形劇あり、本当に愉快なひとときであった。

特に、その夜一緒に歌った「灯」「カチューシャ」「トロイカ」「泉のほとり」等々のいわゆるうたごえ運動にうたわれた労働歌などは、私も東京での学生生活の中で仲間と何度も口にした数々であったが。この時ほど心の底から楽しくうたうことの出来たことはなかった。昼間は泥にまみれ鉄と闘い、夜は人形劇を通じて結ばれた仲間であり、土、日曜と郊外の開拓村や施設をまわって、土地の人々と心のつながりを持っている、そういう若い人々だけが持っている雰囲気に私は圧倒された。

竹内君が私のテントに来て、時の経つのも忘れて話していったのはその後のことである。人形劇を通じて得た彼の人生観、そして夢を。そのはずんだ顔が今でもありありと思い出される。

明朝、湖上をおおった霧をとうして、にぶく光る朝日をあびながら再会を約して、私は一人昭和新山に向った。四十日にわたる旅も終りに近づき、苫小牧の先輩に預けてあった荷物を受け取るのと、竹内君に会う為、倶知安から胆振線で伊達に出た。白、黄、紅の煙をはく製鉄所の煙突、そして寒々とした駅前広場を見おろす室蘭駅のホームに降り立つとジャンパー姿の彼が走って来るのが見えた。まったく、十年来の友に会う感があった。そこには時間をこえた、再会のよろこびだけではなく、彼らの生活があり歌があった。彼等の案内で有意義な一日の送れたことが今でもうれしく思う。

程は今までに何人の友を得、また失っただろうか。その中には幾年も付き合いながら、ついに腹を割って話し合うことの出来なかった友が多くいた。特に実社会に出てからは、一層それが多い。「友を得る」それは心のふれ合いであり お互いの人生を豊かにしてくれる絆である。いわゆる学生時代に得た親友もいれば、室蘭の友のようにほんのつかのまのことであるのに、私の人生の一頁に深くきざまれた、深い感銘をあたえてくれるような友もいる。長い時間が友を得る条件ではない。

洞爺湖の風景

高崎　西川　両先生の作品から

第十八回高知県展は十月三十一日から十一月十五日まで県民ホールで開かれた。

本校からは、洋画の部に技術担当の高崎先生の「装置」、そして彫塑の部に美術担当の西川先生の「女」が、それぞれ入選、そろって褒状を獲得した。

今回は、両先生のそれぞれの作品についての説明を聞かせていただくことにする。

高崎元尚先生

装置という題名には別に意味はないが。他の人の作品、例えば皆のよく知っている、ミレーの「晩鐘」、あれなんかを見て感じることはみんなだいたい決まっているでしょう。それは、それらの作品の中に〝芸術〟が入れてあるからだ。ぼくのはそれと違う。ぼくの絵の前で感じることは自由だ。どう感じてもよいし、また感じ方も違うだろう。ぼくの絵の〝芸術〟が外にあるからだ。それで、あの絵の題を「装置」とした。

絵というものは、「ここをこう画いたら人はこういうだろう。」という考え、悪いいえばたくらみを持って画くものではない。

これはここで特にいっておきたいことだが、もし、ぼくの作品を芸術と認めるならば、他の人の作品は芸術ではないし、また、他の人の作品を芸術と認めれば、ぼくのは芸術ではない。あの絵が今までの絵とまるっきり違うからだ。あの絵の動機はわからない。苦労も別にないし。とにかく二十四年に大学を卒業してからずっと画いているうちにああなった。蛾が電燈の光を求めて飛んで来てぶつかって倒れるのはばかりしいけれど自然だろう？。あの蛾のようにぼくはずっと進んできた。

それから、まだ、あの絵がどういう内容を持っているかは、ぼく自身にもわからない。が、みんなが感じることは先に述べたように自由だ。ただネ、他の人の絵を、「あっこれが絵だな」と思ってずっと見てくるでしょう。そしてぼくの絵の前にきてびっくりする、「これが絵か。」と思って、そのとき、何が何だかわからなくてもホッとして、すがすがしい気持になった人、その人にはぼくの絵がわかったんだよ。

装置の黒いバックにはってあった白い紙、あれを表へめくらしていただろう。あれは世界的な発明だよ。裏へめくらすのは、レリーフで今までにもあったが、表へめくらすのはぼくが最初だ。

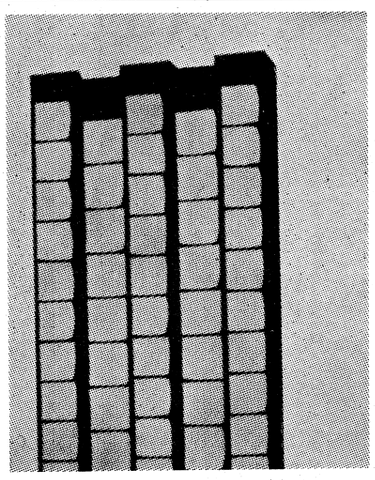
最後に一つ、直接あの絵には関係ないけど、ぼくの第六回目の個展が銀座の樂画廊で十二月七日から十二日まで開かれる。「装置」と同じようなものを沢山展示するつもりだ。

西川興亜先生

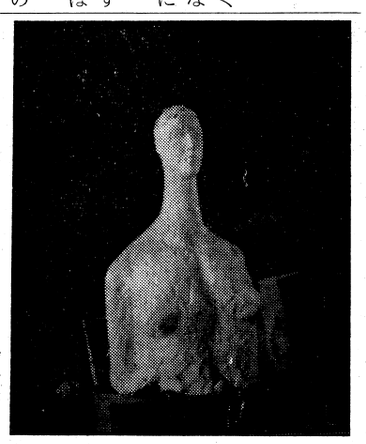
「女」はずっと前から構想をねっていて五輪休暇中に仕上げた。抽象にしたかったのだが、そうすると審査員がむつかしくて県展に入選できないから仕方なく具象にした。ふつうの彫刻と比べて型が違っているからって抽象と考えてはいけない。あれはりっぱな具象だよ。

作品の動機は、他の人に反撥を感じてね。こんなことを言っては他の人に失礼だけど、彫塑とは、自由に何にも束縛されずに形づくるもので、ただの土のかたまり、木のかたまりじゃないんだ。まあ、ぼくの「女」は今度の県展じゃ型破りだろうな。

モデルはないよ。生徒からはよく、モデルは奥さんだろうって聞かれるけど。もし、似てるとすれば、それは直接見ていなくても、内にある愛情が自然ににじみでたものだろうな。



高崎先生の作品「装置」これは県展の入選作ではない



西川先生の入選作「女」

一心廃業する

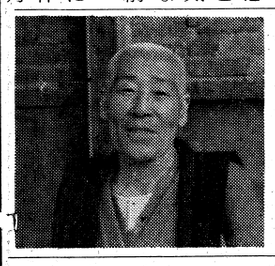
そもそも一心の営業しはじめは今をさかのぼる十八年の昔、土佐高優勝戦進出の二、三年前、今の堀詰から現在の所に移転して開業した。創業当時から現在と同じく大いり満員で、付近の人にはそれからずっと、土佐高の指定食堂と思われた程である。

現在の〝おんちゃん〟が七十才で、〝おばちゃん〟が六十四才、「始めた当時はよかったねえ。土佐の生徒は鼻息があらくあばれんぼうで、へいを乗り越えてやってきた。今の生徒は昔に比べておとなしいが、またその半面物事を利巧的に考えるようになったね。」

このころ、現在巨人のキャッチャーである大橋選手も野球部員たちといっしょに毎日せっせと通っていたという。当時はおんちゃんも丈夫で、毎日自転車に乗って大島校長の家へ出前にも行っていたし、休みには大好きなつりやあみうちもやっていた。「食いにげなど、土佐の生徒に限って絶対にない。」と断言する、こんな面にも土佐高生と一心との深いつながりがあるのではないだろうか。

また、よくおんちゃんに怒られても、その翌日、そんなことを忘れてひょこっと来た生徒を見ると〝うちの子がもんできたような気がした〟そうである。このような一心のおんちゃんも、二、三年前から急に体がつかれるようになって、出前もやめ、大好きなつりにも行けなくなって店もたびたび休むようになり、いよいよこの九月廃業にふみきった。

「今まで続いたのも、皆さんの若さと接したためで本当に感謝しています。」最後に一心のいわれを聞くと、「商売を始める時、一心になって商売にうちこむという意気ごみからこの名をつけた。皆さんも一心の名の通りにこれからの生活を進んでほしい。」一心の厚いもてなしをうけながら、一心を惜しみながら我々記者はそのなつかしさにひたったのであった。



部員募集

当新聞部も、女性気の全然なかったのに、最近では中学女子記者がどっと増えました。先輩などは「軟弱の気風が見える」などと言っていますが……。さて部員募集です。やる気があれば誰でもできる部です。特に中三・中二を求む。希望の方は部室までどうぞ。

秋

木の葉が落ちる　落ちる　遠くからのように
大空の遠い園生が枯れたように
木の葉は否定の身ぶりで落ちる
そして夜々には　重たい地球が
あらゆる星の群から　寂寥のなかへ落ちる
われわれはみんな落ちる　この手も落ちる
ほかをごらん　落下はすべてにあるのだ
けれども　ただひとり　この落下を
限りなくやさしく　その両手に支えている者がある

薔薇の内部

何処にこの内部に対する
外部があるのだろう？　どんな痛みのうえに
このような麻布があてられるのか？
この憂いなく
ひらいた薔薇の
内湖に映っているのは
どの空なのだろう？　見よ
どんなに薔薇が咲きこぼれ
ほぐれているかを　ふるえる手さえ
それを散りこぼすことができないかのよう
薔薇にはほとんど自分が
支えきれないのだ　その多くの花は
みちあふれ
内部の世界から
外部へとあふれでている
そして外部はますますみちみちて　圏を閉じ
ついに夏ぜんたいが　一つの部屋に
夢のなかの一つの部屋になるのだ

子供

知らず識らず　みんなはじっと見ている　幼な児の
遊びを
時おり　その横顔から　全き存在の顔が
ちょうどみちあふれた時間のように
明るく　完全に　たち現われるのを
その時間が鳴りはじめ　時を打ち終るのを
でも　みんなは指折り数えて聞いてはいない
労苦にくもり　生活に倦んだひとびとは
まるで気づきもしないのだ　どんなに幼な児が堪え
ているか――
疲れて　小さな着物を着たまま
まるで待合室にでもいるかのように　ひとびとと並
んで坐りながら
自分の「時」を待っているときでさえ
どんなに幼な児がすべてに堪えているかを

――リルケ――
（訳　富士川英郎）

電気器具は
京町
穂積電業社
TEL ② 6646

センスあるメガネ
イリキ眼鏡店
高知ハリマヤ町 電②0998番

高知一の定評
健康と美容におすしをたべましょう
菊寿し
本店　大丸前　② 3366　支店　中央公園西口　③ 0214
お二階も一般席ですのでお気軽に御利用下さい

現職の高知市の先生がお書きになった
嶋岡　晨著
獣たちの叫び
高校生新書　三一書房発行
生徒の皆様及御父兄の方に
是非おすすめ致します。
金高堂書店
中ノ橋通り　TEL②8285～6

本のデパート
片桐開成社
本店　京町角　支店　五丁目
電話②0935・2774・8583・1032

帽子は気品ある
アクセサリー！
帽子は
サワムラ
高知市帯屋町

パイロット・セーラー・プラチナ
ニューマン・舶来など
メーカー品が豊富に揃っています
高知大丸
高知　京町　電②5111
3階　万年筆売場